

河田 コレクション展 文庫

河田文庫には、河田恵昭センター長より寄贈された防災に関する資料約3000点が所蔵されています。河田文庫コレクション展では、期間ごとにさまざまなテーマで展示を行います。第1回目である今回は、「伝える・活かす」をテーマに河田文庫資料から6点、資料室所蔵の一次資料より1点を展示しています。

1.17を辿る -伝える・活かす 震災の教訓-



2023年
3月末まで
河田文庫内で
開催



資料室ニュース



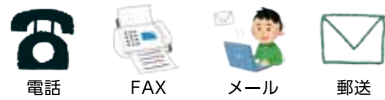
人と防災未来センターは、2022年4月で開館20周年を迎えました。それと同時に、資料室も開室20周年を迎えました。引き続き震災資料の収集・保存と利活用に取り組みますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

資料室の感染防止対策について

資料室は、感染防止対策をとりながら開室しております。
資料室利用者の皆様には、引き続き、感染防止のご協力をお願いいたします。

滞在時間の短縮にご協力をお願いします

- 閲覧する二次資料は事前に検索システムをご利用下さい。
- 一次資料の閲覧は事前（3日前まで）に申請を行って下さい。
- レファレンス・調べ物は、窓口以外（電話・メール・FAX）をご利用ください。



閲覧席の数を減らしています

- 利用者同士の距離を一定程度保つため、閲覧席の間隔を広げています。
- 利用者間の飛沫感染を防ぐため、私的な会話はお控え下さい。



▲閲覧席には、パーティションを設置しています。

共用機器類の利用停止 (または一部利用停止)

- 不特定多数の方が使用する機器の利用を制限しています。

映像資料視聴をご希望の方は
イヤホン(有線)をご持参ください。



無線イヤホンには対応していません。

資料室開室20周年によせて

人と防災未来センター長 河田 恵昭

本年、人と防災未来センター創設と同時に、資料室開室20周年を迎えることになりました。しかし、震災資料収集は震災直後から兵庫県の委託事業として始めましたので、27年の歴史を有しています。現在、収集した震災関連の一次および二次資料は24万点を超えています。この間に、当センターから発信した教訓は、すべてこれらの資料解析に基づくものであるといっても過言ではありません。センター長としてとても感謝しています。しかも、震災資料は、どのように活用するかによって価値が見いだされるものであり、その点でも資料室が実施した活動は、震災復興に大きく貢献したと評価しています。そして、収集された資料の背景には、それを作った“ひと”がいます。資料解析とは、資料を作った人が、一体、何を考えていたのかを解きほぐす作業でもあります。そして、その知見を豊かな社会づくりに役立てることが当センターの役割です。この過程において、見かけは無機質な震災資料も、活用によって“いのち”が与えられるのです。その意味で、震災資料は生き物であり、私たちはそれを活用することによって、安全で安心な社会づくりができると考えています。当センターの資料室はその活動の拠点になっているのです。

開室20周年 資料室の将来展望

震災資料研究主幹 林 勲男

人と防災未来センターの資料室には、一次資料・二次資料あわせて24万点を超える資料が保管されています。阪神・淡路大震災に関するものが中心ですが、図書・文献・視聴覚資料などの二次資料の中には、国内外で発生した他の災害に関するものも含まれています。新たに公開された河田文庫も含めた所蔵資料は、情報検索システムによってその概要を知ることができ、2021年10月からは、「国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（ひなぎく）」との連携も開始しました。

災害関連のミュージアム（博物館や伝承館など）の展示は、それぞれの施設が所蔵する資料の社会的インターフェイスとして、災害の経験や教訓をわかりやすく伝えるものです。それを支えるのが、資料を収集し、保存・管理し、有効な利活用を検討するアーカイブの役割です。今後は、所蔵資料をさらに広く利活用していただくため、データベースをより充実させ、災害の経験と教訓を伝えるという共通のミッションをもった他のミュージアムやアーカイブとも、それぞれが持つ資料を生かした連携活動が展開できることを期待しています。

震災資料をお持ちの方に

人と防災未来センターでは、現在も震災資料の収集を続けています。「こんなものでいいのかな？」と、おっしゃる方もなかにはいらっしゃいます。寄贈できるか分からないとお考えの方や、震災後、すぐには手放せなかったものの、**震災の出来事を伝えるために活用したい**とお考えの方など、悩んだ際には、**ぜひ一度、資料室までご相談ください。**

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
DRI 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター資料室

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2 人と防災未来センター西館5階
TEL 078-262-5058 FAX 078-262-5062
URL <http://www.dri.ne.jp>
開室時間 9:30~17:30(展示施設とは時間が異なりますのでご注意ください)
閉室日 毎週月曜日(月曜日が祝日又は振替休日の場合は翌平日)
12月29日から1月3日



資料室は無料でご利用いただけます



資料室開室から 今日までの歩み



- ・人と防災未来センター開設
- ・資料室が西館2Fに開室
- ・資料室ニュース発行

資料室が開室した2002年4月から今日までの出来事を年表にまとめました。

これまでも阪神・淡路大震災の情報や防災に関する情報を発信するために様々な活動を行ってまいりましたが、これからも引き続き皆様に情報を発信していきます。

開室当時に携わった 先生方からの メッセージ

(財)21世紀ひようご創造協会・(財)阪神・淡路大震災記念協会嘱託職員として、初代震災資料研究主幹として、資料室開室の礎を築いたお二人からメッセージをいただきました。

資料室への期待

佐々木 和子 (在籍：1996年12月～2002年3月)

高度経済成長後都市化した街を襲った、阪神・淡路大震災。途絶したライフライン。倒壊した家々、崩落した高速道路。長期にわたる避難所・仮設住宅での暮らし。ボランティア達の手助けをした。街が揺れ、これまで隠されてきた社会の矛盾も顔を出した。ここからどう立ち直っていくのか、各地で模索が続いた。

兵庫県が「震災とその復興に関する資料・記録」を集める活動をはじめたのは1995年10月。「教訓として残していかなければならない」財産*として、翌年12月から収集担当嘱託を雇用し、本格的に収集に取り組んだ。この事業は、(財)阪神・淡路大震災記念協会(当時)に引き継がれ、2000年6月からは延べ400人の大規模調査が行われた。これらが現在の資料室所蔵資料につながっていく。

資料室に委ねられた資料は、被災地でおこった出来事の痕跡。人々の模索の総体。結局「メモリアル」は「防災」という語に変わってしまったが、資料に刻まれた「思い」の熱量が減じることはない。被災地の「記憶」の大きな塊が託されたのだ。

開室から20年。背負った「記憶」を次代に送るための資料室。その原点を問い直し、多様な出会いが交差する場であることを期待する。

*1995年、(財)21世紀ひようご創造協会チラシ

震災資料研究主幹として思ったこと

立木 茂雄 (同志社大学社会学部・教授、在職期間2002年4月～2003年9月)

人と防災未来センター開設初年度の2002年4月から翌2003年9月までの18ヶ月間、震災資料研究主幹としても関わった。短期間だったこともあり、かたちへのこせるものはほとんどない。ただ、その頃に考えたのは、資料室は「もの」だけではなく、映像やデジタルデータなどあらゆる情報資源を対象にするだろうから、図書館情報学などの専門家も加わってもらいたい、ということだ。このような願いがフォーラムとして具体的な形を結んだのが「阪神・淡路大震災のデジタルアーカイブ—今後の活用を考える—」(2015年2月にTell-Netと共催)である。阪神・淡路大震災から20年を経て、すくなくとも10種類のデジタルアーカイブが整備され、このような資料が横断的にインターネット空間で共有されるように、「もの」から映像、データベースまでの多種多様な情報資源の記述に共通に使えるメタデータを付与する作業が、当時必要だと確認された。このフォーラムから7年、資料室開設から20年たった現在、物理的には分散している他のアーカイブと協働して、資料室は阪神・淡路大震災の経験の総体を見える化する作業をさらに着実に前に進めていると思う。

2002

2003

2004

2015

2012

2010

2007

2019

2021

2022

- ・ひと未来館(東館)オープン
- ・こどものほんコーナー設置

「震災資料の公開等に関する検討委員会」設置(～2004年度末)

震災資料集vol.1
『震災における住まいの再建：論説と資料』発行

「ぼうさいみらい子ども文庫」開設

資料室を西館2Fから5Fへ移設

Facebookページ開設



- ・河田文庫開設
- ・震災資料受入方針等検討委員会の開催



※国立国会図書館ウェブサイトより転載

国立国会図書館
東日本大震災アーカイブ(愛称：ひなぎく)との連携

人と防災未来センター資料室開室20周年

震災資料専門員 としての思い出



資料室開室から今日までに震災資料専門員として活躍された方々に、専門員当時の思い出を語っていただくとともに、資料室の今後への期待について述べていただきました。



人と防災未来センター開館20年おめでとうございます。2002年4月、資料室は防災未来館(現・西館)とひと未来館(現・東館)のうち、防災未来館2階に設置されました。観覧の導線上、来館者は必ず資料室を通っていました。開館から1年間、資料専門員4名、司書2名、オペレーター1名の計7名で構成されました。2000年から大規模に収集された震災資料は、開館時は約16万点(現在は約20万点)。初年度、スタッフの発案で夏季には研究部と協力して「夏休み子ども防災ワークショップ2002」を3プログラム実施しました。ワークショップの成果物である壁新聞を資料室の壁面に貼り、ミニ展示も開始しました。情報発信として「資料室ニュース」の創刊など、新しく作る楽しさがありました。地震により自宅が全壊した後、いきいきとボランティアを行う高校の後輩たちのようになぜ働けないのかと恥じていた自分が、震災資料を通して様々な方々と出会うことができました。かつての震災資料専門員が全国にたくさんいます。震災資料専門員がやってきたことも震災資料です。震災の記録と記憶をまもり、次へおくる迂遠にも見えがちで稀有な営みが続くよう祈念しています。

水本 有香(在籍：2002年4月～2006年3月)

震災資料専門員を務める中で、特に印象に残っている業務は、資料寄贈者からの体験談の聞き取りです。ご寄贈いただいた資料一つひとつには、提供者の震災にまつわる体験が詰まっております。寄贈を決意されるまでにも様々な経緯があります。

中には、犠牲者の形見を寄贈して下さるご遺族の方もおられます。私が相談を受けた中にも、長年お手元に置かれていた、亡くなったご家族の形見を震災資料として寄贈するかどうか迷われている方がいらっしゃいました。まだ気持ちの整理が付かないという思いと、後世のために役立つならという思いのほざまで揺れておられたため、「ゆっくり遺品とともに過ごされて、いつかお気持ちが向いた時にご連絡をいただけたら」とお伝えしたことを覚えています。その経験以来、犠牲者にご遺族の思い出が詰まった、世界でたった一つの大事な品物をお預かりすることに対する責務と、その背景や寄贈者の思いを余すところなく利用者に伝える難しさを改めて感じるようになりました。

微力ながら、震災資料専門員として、震災資料一つひとつに込められた思いや声を後世にお伝える架け橋を務めさせていただけたことを光栄に思います。

高野 尚子(在籍：2006年4月～2009年3月、2010年4月～2013年3月)

資料室開室20周年おめでとうございます！

ひとぼう在任期間でもっとも印象深いのは、東日本大震災です。

14時46分、私は資料室の受付カウンターで、大阪在住の女性から「私にはわかる、地震はまた来る」という、長いお話をお聞きしていました。そのうち眩暈のような感覚があり、地震の揺れだと気づきました。女性は気づかず話し続けておられ、同僚が通りすがりに小さく「揺れてますね」と呟き、私もアイコンタクトで同意しました。長周期地震動階級1程度の、ゆっくりとした長い揺れが収まった頃、女性の気持ちも収まり帰ってゆかれました。

その後、被害の様子がわかってくるにつれ、被災地支援に関連した問い合わせ電話が増え、それらにできる限りの対応をしている間に任期満了を迎えました。退職時にいただいた寄せ書きは、大部分が白いままの色紙でした。何も書かれていない余白に、現地支援で奮闘し続けている研究員さんたちの姿を感じました。

現在私は、名古屋大学減災連携研究センターで研究員として勤務しております。資料室での3年間があればこそ、感謝しております。

益々のご発展を祈念致しております。重ねておめでとうございます。

末松 憲子(在籍：2008年4月～2011年3月)

私が在職したのは2009～2011年度であり、阪神・淡路大震災15年前後の時期だった。被災地の震災体験者が徐々に減りつつあることが報じられ、体験の語り継ぎに加えて、記憶の痕跡である「資料」を介して他者の多様な歴史的経験にいかに向き合っていくかが、あらためて問われていたように思う。一方、それまで資料を手元に置いていた個人・団体から、資料提供の相談を受けることも多かった。15年の時の経過のなかで、震災資料の「受け皿」として、資料室がその役割を増していると感じた。

創造協会・記念協会による資料保存事業で目指されたのは、長期的な視野で被災地の記録・記憶を残していく社会の仕組みづくりであったと思われる。そうした活動を通して、「資料」をめぐる被災者・市民との相互理解が深められ、多様な関係性が結びついてきたからこそ、今なお資料室に資料が託されている。このことを受けとめ、被災地域に存立する資料室は震災の資料や記憶の「受け皿」として、さらに人と資料、人と人をつないでいく結節としての大きな社会的役割を担っている。克服すべき課題は多いだろうが、地域に根ざし、社会に開かれたかたちでその役割を果たしていくことを期待したい。

吉川 圭太(在籍：2009年4月～2012年3月)

災害体験の継承について研究していた私は、大学の修士課程を4年かけて修了し、そこで息切れしてしまっていた。何か別の場所で、研究テーマを考える場はないだろうか。資料室は、私にとって最適な場だった。

採用が決まったのは2011年2月中旬。そこから1ヶ月も経たない2011年3月11日、巨大な地震災害、津波、原発事故が起こった。初めて出勤した日、6階の研究部はほとんど誰もおらず、東北地方の地図や、緊急の会議を積み重ねてきたであろう痕跡があった。資料室のカウンターの電話は何度も鳴った。「神戸からボランティアに行きたい。被災当時と今の神戸の写真はないか。必ず復興できると現地の人々に伝えたい」。私は、慣れない手つきで一次資料の写真や映像、二次資料の書籍類を広げ、問い合わせに対応していった。あれから約10年が経った。今年3月、アーティストの瀬尾夏美さんとともに、東日本大震災をめぐる人々の経験を綴った書籍『10年目の手記 震災体験を書く、よむ、編みなおす』を出版した。資料室で働き、遠く離れた場所から渦中の人々を後押しする。この経験は、私の研究者としてのスタンスを作ってくれた。

高森 順子(在籍：2011年4月～2014年3月)

資料室には5年間在籍しました。震災20周年やFacebookページの開設、震災資料集Vol.2の発行など様々なことがありましたが、その後の資料室にも大きな影響を与えたのは写真のダウンロード貸出の開始ではないかと思っています。元々上からできないかと打診され、ではこういう風にやりましょうか、とお返ししたら別のところから待たされたが、しばらく宙に浮いていた案件です。平成27年になって配属された事業専門員の方がしっかり根回ししてくださり、実現できました。

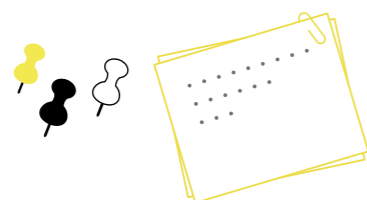
ダウンロード対象の113点の写真も以前から「よく貸し出す写真一覧」としてウェブサイトに掲載されていたものをそのまま使用しています。従って私が企画したというよりは、元々あったものやほかの方のご要望・ご意見をまとめて使えるようにした、というのが実感です。とはいえ今でも利用されているようで、担当者としては大変嬉しいです。

深井 美貴(在籍：2014年4月～2019年3月)

今回は紙面上の都合で6名しか思い出を語っていただけませんが、震災資料専門員OB・OGとして多方面で活躍している方々はたくさんいます。これからも資料室の発展とともに、OB・OGの活躍にご期待ください。



震災資料研究主幹 から見た資料室



震災資料研究主幹は、震災資料専門員に助言や指導をしていただく立場であり、専門員にとってなくてはならない存在です。

そんな震災資料研究主幹を歴任された先生に当時の思い出を振り返っていただきました。

歴史の資料室／資料室の歴史

矢守 克也(京都大学防災研究所・教授、在職期間2003年10月～2015年3月)

筆者が資料研究主幹として資料室の仕事に関わっていたのは相当前のことで、あの頃を思い起こすために別途資料を求めたいほどである。言いかえれば、ひとつの歴史として語るができるくらいの活動を、資料室は多くの関係者の協力のもと積み重ねてきたわけだ。みなさんの長年にわたるご努力に心から敬意を表したい。

資料室は開室20年を迎えるとのことだが、設置のための準備期間を含めれば実際の歴史はもっと長い。当時の記憶をたどってみると、新規資料の受入と既存資料の整理、大切に保存することと広く公開すること、「これまで」を振り返ることと「これから」に備えることなど、資料をめぐるいくつかの次元で、ときに相反する2つの考え方の間でバランスをとることに苦慮していたことを思い出す。

しかし、若干弁解めくが、今振り返ると、こうした試行錯誤や右往左往の記録が、資料そのもの以上に、震災資料に関する重要な知恵なのだと思えてくる。震災資料室は、もちろん阪神・淡路大震災の歴史に関する資料室であるが、同時に、資料室の歴史自体が後世の検証の対象になるということだ。その思いをもってこれからも仕事にあたってほしいし、ますますの発展に大いに期待している。

震災資料研究主幹時代を振り返って

—資料の受け入れを継続する—

牧 紀男(京都大学防災研究所・教授、在職期間2015年4月～2021年3月)

2015年度から2020年度まで6年間震災資料研究主幹をつとめた。任期中に阪神・淡路大震災の25周年を迎えることから、委員会で、資料収集・利用の検証を行うとともに、今後の資料収集の方向性について検討を行っていただいた。検討結果は『震災資料の受入方針等検討委員会報告書』（令和元年12月）にまとめられている。わざわざ委員会を設置・検討を行ったのは、震災25年以降も継続して阪神・淡路大震災に関する「資料の収集を継続していく」という大方針を明確に打ち出す（確認する）ことであった。その背景には資料室の収蔵スペースが逼迫してきていることもあった。関係する人々の震災資料の収集を継続するのだという思いは強く、収蔵庫の拡充が行われるとともに、以下のような提言がまとめられた。今後の資料収集の継続のため委員会の提言を再掲しておきたい。

- 1 今後とも阪神・淡路大震災の経験と教訓を次世代に伝えていくために震災資料の収集・整理・保存活動を続けていく必要がある。
- 2 既に19万点の資料を所蔵していることから収蔵余地は限られたものとなっているが、あらゆる方法で収蔵スペースの確保に努めるべきである。
- 3 収集した資料の一層の利活用促進を図るために、今後とも、資料の公開や発信に努めていくことが重要である。

震災資料のメッセージ 2022(前期) 「門出の思い出を新成人へ」



現在、開催中の震災資料のメッセージ2022「門出の思い出を新成人へ」では、阪神・淡路大震災直後に倒壊家屋から被災者の「思い出」が救い出されたことに焦点を当て、震災資料を紹介しています。

また、2022年4月で人と防災未来センターが開設20周年を迎えたことから、センター開設前から今日まで、震災資料をどのように生かし、震災を伝えてきたかについても紹介しています。

開催期間

2022年6月28日(火)～2023年1月29日(日)

展示場所

人と防災未来センター
西館3階(有料エリア)

資料室開室
20周年の歩み
資料室ってどんなところ？
令和4年度資料室企画展



2022年5月31日(火)～2022年11月27日(日)

開室時間

9:30～17:30

場所

人と防災未来センター
西館5階 資料室(無料エリア)

資料室は開室20周年を迎えました。そこで、資料室がどのようなところなのか、震災資料専門員はどのような仕事をしているのか、改めて知っていただきたいと考えています。資料室の歩みを紹介しながら、資料室が人と防災未来センターでどのような役割を果たしているのかを展示を通してご紹介します。併せて、モノ資料の展示から、普段は見る事が出来ない、資料をどのように保存しているのかについてもご紹介します。